

2015年3月1日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書8章22～25節

説教「信仰はどこにあるのか」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松 牧人

主イエスが一緒に乗り込まれ、主イエスが「向こう岸に渡ろう」と言われ、そのとおりに出発した舟も嵐に遭うことがあります。この舟は教会を象徴しているといってもよいでしょう。私たちを巻き込む嵐には、いろいろなものがあるでしょう。教会の歴史の中で繰り返されてきた迫害の嵐があり、今も世界で絶えることのない戦争や紛争の嵐があります。政治や経済の大きな変動の中で、仕事や生活が大きくゆすぶられることもあるかもしれません。個人的にも、病気や事故、思いがけない災害や災難に見舞われることがあります。さらには、外からくる災いだけではなく、私たち自身の高ぶりや愚かさや弱さから生じる交わりや人間関係のむずかしさや混乱もあるでしょう。そうした試練や誘惑の絶えない世の海を私たちは渡っていくのです。

さて、「渡って行くうちに、イエスは眠ってしまわれた」とあります。日々多くの群衆に取り囲まれて宣教し、病を癒し、人々に仕えてこられた主イエスは、心身の疲れを覚えて、ぐっすり寝込んでしまわれたのです。ところが、突風が湖に吹き降ろしてきて、舟は大波にもまれ、水をかぶります。弟子たちの何人かはこの湖の漁師たちでしたから、湖が荒れ始めた時の対処法を多少は心得ていたはずですが、今回の嵐にはその経験も技術も役には立たず、彼らは身の危険を覚えて、ついに眠っておられた主イエスを起こし、「先生、先生、おぼれそうです」と言います。

弟子たちに叫びに目を覚まされた主イエスは、起き上がって、風と荒波とをお叱りになります。すると嵐はおさまり、湖は再び穏やかになりました。しかし、主イエスは弟子たちに向かって、「あなたがたの信仰はどこにあるのか」と言われます。これはお叱りの言葉です。ただ、マタイによる福音書やマルコによる福音書にある同じ記事と読み比べてみると少し違いがあることが分かります。マタイによる福音書では「なぜ、怖がるのか。信仰の薄い者たちよ」となっている。信仰の薄いとは「小さな信仰」という言葉です。また、マルコによる福音書では「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」となっています。これらはどちらも信仰がない、あるいは小さいという否定的な言い方ですが、ルカによる福音書では「あなたがたの信仰はどこにあるのか」となっています。微妙な違いですが、主イエスは弟子たちが信仰をもって生きていることを認めながらも、どこにあるのか、あなたがたの信仰は本当ならここにあるはずではないか、と積極的な期待を込めて叱っておられるのです。神を信じていることを前提として、主イエスは私たちを励まし、叱ってくださっているのです。嵐の中にあっても、思いがけない事態に遭遇しても、悪戦苦闘することになっても、信仰がどこにも行ってしまわずに、主イエスを信頼していることが求められているのです。

この出来事の前に、有名な「種を蒔く人」のたとえがありました。その結びとして、

主イエスは良い土地に落ちた種が多くの実を結ぶとはどういう人のことかを説明され、「立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ」(8:15) ことだと言われました。主イエスが、あわてふためく弟子たちに言おうとされたこと、そして何かあると恐れと不安にとりつかれる私たちに求められることは、主を信じ、忍耐強く御言葉に聞き従う生き方なのです。

嵐を静められた主イエスの力を目の当たりにした弟子たちは、恐れ驚いて「いったい、この方はどなたなのだろう」と言い合ったとあります。信仰に生きるとは、この驚きと問いを事あるごとに繰り返しつつ生きることだといってよいのではないのでしょうか。主イエス・キリストをこういう方である分かってしまうことはないし、分かってしまった神さまは私たちの偶像になってしまうのです。私たちは、主イエスの恵みの大きさ、広さ、深さ、高さにたえず驚かされ、目を開かれながら、信仰の旅を進めるのです。

この個所について、18世紀ドイツ敬虔主義の流れに立つベンゲルという聖書学者は、「舟は揺れる、しかし沈まない」と簡潔で要を得た注解を書きました。「舟は揺れる、しかし沈まない」。この信仰をしっかりと受け継ぐことのできた一人の人のことが、ルカによる福音書の続編、使徒言行録の結びに出て来ます。ローマに護送される使徒パウロの船旅を記した使徒言行録 27 章の記事です。囚人パウロを乗せた船はエウラキロンと呼ばれる暴風に襲われ、水夫も乗客も皆助かる望みをなくしてしまうのです。しかし、パウロだけは、嵐にもまれる舟の中で、冷静さと確信をもって、乗組員たちを励ましたのです。「元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです・・・」(使徒言行録 27:22 以下)。そして、彼はうろたえ、意気消沈している人々にこう勧めます。「今日で 14 日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません」。(27:33、34) パウロは、その人生の晩年、嵐の中でこの信仰に辿り着いているのだといってよいでしょう。

私たちは主イエスに招かれ、主イエスと共に舟旅を進めている。「舟は揺れる、しかし沈まない」。私たちのために十字架につき復活し、罪と死の力から私たちを解放してください。何が起ころうと、私たちは決して暗い運命の下にはありません。生きる時も死ぬ時も、順境の時も逆境の時も、私たちは主イエス・キリストの愛の御手から引き離されることは決してないのです。

(3月1日主日礼拝説教から)